

- ◇学界の動向
- ◇学会の紹介
- ◇石本基金出版助成（第4回）公募について
- ◇会務報告

- ◇編集委員会からのお知らせ
- ◇学会・研究会予告
- ◇寄贈図書紹介
- ◇事務局からのお知らせ
- ◇編集後記

学界の動向

メタ存在論：分析形而上学の最近の展開

小山 虎（慶應義塾大学）

このニュースレターで分析形而上学の最近の動向を報告する機会をいただきましたので、ここ数年特に熱心に論じられているメタ存在論について簡単にご紹介させていただきます。

近年の分析哲学で形而上学が注目を集めていることについては、ご承知の方も多いと思います。実際、本学会の年次大会のプログラムや『科学哲学』の目次を見ても、性質や出来事、時間、物質の対象の同一性といったトピックを扱ったものを目にする機会は少なくありません。これらは「分析(的)形而上学」と呼ばれるのが一般的ですが、実際には、英米で出版されている分析形而上学のアンソロジーを眺めれば明らかのように、扱われているトピックの多くは伝統的な形而上学とほとんど変わりません。

おそらく分析形而上学が伝統的な形而上学と一番大きく異なる点は、形而上学そのものの正当性が中心的なトピックに含まれていることでしょう。特にここ数年ではメタ存在論(metaontology)、つまり、「存在論的論争(たとえばメレオロジー的和は存在するか否かといった論争)は果たして正当な哲学的論争と言えるのか」という問題が大きな関心を集めています。最近出版されたセオドア・サイダー他編 *Contemporary Debates in Metaphysics* (Blackwell, 2007) では最終章がメタ存在論に割り当てられていますし、近刊予定のデイヴィッド・チャルマ

ズ他編 *Metametaphysics* (OUP, 2009) では収録されている論文のほとんどでメタ存在論が扱われています。

メタ存在論の概要はメタ倫理と類比的に説明されることが多いようです。たとえばチャルマーズは、メタ存在論的立場を「〈何が存在するか〉という問いに客観的な答えはあるのか」という問いに対する回答の違いとして分類しており、この問いに肯定的に答える立場を「存在論的実在論(ontological realism)」と呼び、否定的に答える立場を「存在論的実在論(ontological anti-realism)」と呼んでいます。実在論者の典型的な主張は、「存在論的論争は単に言葉の上だけの中身のないものに過ぎない」とか、「存在論は概念枠と相対的であり、どういった対象が存在するかはどの概念枠を採用するかという規約の問題に過ぎない」というおなじみのものです。つまり、従来の分析哲学では反実在論が主流だったとみなすことができるわけです。実際チャルマーズは、カルナップやパトナムを反実在論者の代表例に挙げて反実在論を展開しています(ちなみに、実在論者として挙げられているのは、クワイン、ヴァン・インワーゲン、サイダーなどです)。

こういった批判に対し実在論の側からも積極的な応答がなされています。たとえばサイダーは、「メレオロジー的和の存在を巡る論争は、肯

定側と否定側の双方が受け入れられる中立の言語が存在しないという点で典型的な言葉の上での論争とは異なる」と指摘した上で、デイヴィッド・ルイスの自然的性質のアイデアを援用して、「メレオロジー的和が存在するか否かが規約の問題だとしても、どちらの規約のほうがより自然のかという問いには客観的な答えがありうる」と反論しています。また、「メレオロジー的和は存在するかという問いはメレオロジーという形式言語によって厳密に表現できるものであり、もしこの問いに客観的な答えが存在しないのなら、ほかのどんな問いに客観的な答えがあるのか」とも主張しています。

興味深いことに、メタ存在論的立場は実在論と反実在論の二つに分けて終わりではありません。たとえばイーライ・ハーシュは概念的相対性を認めつつ、それが反実在論を含意しないと主張しています。ハーシュによれば、正しい存在論は日常言語の概念分析によって決定されます（チャルマーズはこの立場を「軽い実在論

(lightweight realism)」と呼び、サイダーらの「重い実在論 (heavyweight realism)」と区別しています。マッティ・エクルントは、ハーシュとは逆に、概念的相対性を認めずとも反実在論をとることが可能であると論じています。

以上、メタ存在論について簡単に紹介してきましたが、形而上学者であればこの問題を無視することは許されないということは明らかだと思います。とはいえ、ひょっとすると形而上学者以外には関係のない話題だと思われた方もおられるかもしれません。しかし、パトナムも近著『存在論抜き倫理』で「[[存在論が] 高い地位を確立し、そのことが分析哲学のほとんどあらゆる部分に壊滅的な結果をもたらしてしまった」(邦訳 p. 2) と述べているように、メタ存在論は分析哲学の全体に関わる問題です。いずれの立場に共感するにせよ、分析哲学の伝統に属する方はメタ存在論に関心を持っていただければと思います。

学会の紹介

関西工学倫理研究会の歴史

齊藤了文（関西大学）

関西工学倫理研究会がいつ発足したかは、明確な日付を私は記録していない。資料はあまりうまく整理できていないので、齊藤了文が見つけない記憶を頼りにまとめることにする。

1999年に、中部哲学会で齊藤が、「工学の知識と責任」という題で講演し、その後の懇親会で南山の横山輝雄さんに、Engineering Ethicsの日本語訳として少しかっこいい名前をつけた方がいいと言われて、「工学倫理」という名前で行こうということになった。

それ以降の大きな流れとして、2000年4月に齊藤了文が関西大学の社会学部の教員になったこと、さらに、工学倫理の研究会が京大の院生の間で行われていたことが、関西大学を中心と

して工学倫理研究会を開催している機縁となっている。

2001年4月に出た『はじめての工学倫理』は、初心者用の教科書という意味と、そこで書いている人も「はじめて」工学倫理を学びつつ、書いているという意味を含んでいた。そのために、論文を読んだり議論をしたりする研究会をしていた。初期の頃の参加者には、出口康夫、坂下浩司なども含まれていた。

本が出た後も研究会は細々と続けていた。ここでの基本は、技術者に現場の考えを聞くというものであった。現在もメンバーとして参加していただいている方の話も聞いた。

2003年度からは、萌芽研究に当たったことも

あって、謝礼と交通費を支払って、技術者やその関連の人びとの話を聞くこともできるようになってきた。さらに、この年度は、『工学倫理の諸相』の執筆に当たって、(これは技術者と哲学者のペアによる4つの分野の論文を中心としている)その論文の発表を片方でやりつつ、公開講演会としてゲストに講演をいただいていた。

「工学倫理を深く理解するための事例研究」という説明をつけた第1回「関西工学倫理研究会」(「関西」は「中部、名古屋」との対比)は、2003年5月31日であった。

この公開講演会は、2008年度終わりの現在まで32回を数えることになる。科研費や学内研究費を使いつつ、講師を呼んで議論をしている。現在は、伊藤均、岩崎豪人、小川清次、吉田敬介、野田忠吉、中村収三、などが、コアなメンバーとなって、毎回10人以下でこじんまりと研究会をやっている。

この講演会の特徴は、時間が長いことである。基本は、発表に1時間、議論に1時間が割り当てられている。ただ、興が乗れば制限時間はあつてないようなものである。また、講演会後は懇親会を行うので、その後の議論も活発である。

この議論は、哲学の演習のように、批評し吟味するというよりも、異分野の人びとの話を聞くために、ブレインストーミングに近い仕方であり、しょうもない質問も含めていろいろな話を聞いている。これが二つ目の特徴である。

また、呼んできた講師は、齊藤がどこかの講演会などで話を聞いた人が多い。本などで知っていて、顔を見たことのない人も数人は含まれているが、少数である。そういう意味で、齊藤の個人的な趣味に合うような人びと、詳しく話を聞いてみたい人びとに話を聞いている。そして、分野は多様な人びとである。これは三つ目の特徴であろう。

以下、第2回目以降の公開講演会の講師と題目を並べると、少し興味深いかも知れない。(哲学系の人、二度以上の講演者は所属を省く。)

2003年度：坂清次(三菱総合研究所)「世界の化学企業のレスポンス・ケア活動—事故の歴史と展開」、安部誠治(関西大学 商学部)「鉄道事故と事故調査の諸相」、永田敬(核燃料サイクル開発機構)「もんじゅ行政訴訟控訴審判決に

ついて」、小澤守(関西大学 工学部)「リスクベース・ライフサイクルアセスメント」、大西正曹(関西大学 社会学部)「メンテナンスの社会学」、森健一(関西大学 工学部)「社会的品質管理の提言」、吉田公一(海上技術安全研究所)「船舶の安全性と造船・運航者の対応」、北詰恵一(関西大学 工学部)「土木・建築業界における工学倫理の現状」、中村収三(立命館大学)「技術者倫理が問われる場合」、齊藤了文「特許の対価200億円の衝撃」、土田昭司(関西大学)「人々のリスク認知を社会心理学から考える」

2004年度：羽原敬二(関西大学 商学部)「ハザードとヒューマンファクターに関する一考察」、藤本温「決疑論と技術者倫理」、井上能行(東京新聞 編集局デスク長)「どんな事故が重大事故か—マスコミの視点から」、佐藤健宗(弁護士)「事故の法的責任と事故情報」、山田健二「失敗情報の共有」、張明国(北京化工大学文化法律学院 STS 研究所)「中日のイノベーションの比較」、岡田佳男(雪印乳業株式会社コンプライアンス部)「雪印のコンプライアンス」

2005年度：坂清次「化学プラントに関わる法規制動向と事故への対応」、辛島恵美子(安全学研究所)「これまでの安全工学を補完する研究アプローチの提案」、権上かおる(酸性雨調査研究会(事務局長)・環境カウンセラー(市民部門))「市民からみた企業倫理—三井物産データねつ造事件を例に」、古谷圭一(東京理科大学・恵泉女学園大学名誉教授)「80年代の工学倫理研究」、齊藤了文「エンジニアという専門家について」、小柳正弘(琉球大学 法文学部)「設計問題の倫理的課題—日本におけるエンジニアリング・エシックスの構図を考える」、江口 禎(武蔵工業大学名誉教授)「設計監理」、松本祥尚(関西大学 商学部)「公認会計士という専門家責任と監理」、進藤雄三(大阪市大)「医療専門職の変容」、松本光平(明海大学 不動産学部)「建築士の設計と工事監理の特徴」、竹中利彦「職業倫理としてのエンジニアの倫理—“テクニシャン”との比較において—」、小川清次「ものをつくり、ものをつかう、ということの「倫理的ethical,sittlich」構造の検討」、

2006年度：藤原茂寿(藤原マネジメント・コンサルティング)「企業内エンジニアの仕事について」、八木晃一(独立行政法人 物質・材料研

究機構)「標準化と工学倫理」、森田雅也(関西大学社会学部)「労務管理の対象としての技術者」、福田柳生(大阪大学 非常勤講師)「造船業の品質管理」、斉藤了文「人工物に媒介される倫理」、山田健二「専門家の道徳的意思決定」、吉田寛「情報技術者倫理とガバナンス」、杉本泰治(技術士)「プロフェッショナル・エンジニアとは何か」、小林廣(エネルギー文化研究所)「科学技術の発達融合と倫理意識の変遷」、岩崎豪人「非技術者のための工学倫理」、野田忠吉(住友精密工業(株)社友)「広義のものづくりと工学倫理教育」、志村幸紀「企業倫理に関する一考察 — 企業の道徳的責任への理論的アプローチ」、水野恒夫(ブリジストン)「企業におけるリスクマネジメント」

2007年度:片岡詳子(松下電器(株)法務本部、弁護士)「組織内弁護士について」、除補清一((株)損害保険リサーチ、本社特別調査役)「科捜研の事故調査」、藤木篤「事例研究としてのアスベスト問題 — 神戸大学倫理創成講座の試みを通じて」、柳生孝昭(日本ユニシス株式会社 顧問)「技

術化社会の論理と倫理 — 組込み Software を題材に —」、小川清次「ウィトルーウィウスの技術論について」、井上能行(東京新聞編集局次長)「技術の守成を考える」、山路哲也(海上保安大学校)「遭難船舶に対する安全な避難場所の提供に関する考察 — 欧州における動向 —」、長尾健(東京海上日動火災保険株式会社 コマーシャル損害部 国際クレーム室課長)「技術保険と事故原因究明」

2008年度:中村収三「比較技術工業論」、片倉啓雄(大阪大学 大学院工学研究科)「安全倫理」、野田忠吉「「ものづくり」生産現場における安全確保の活動と工学倫理」

(ちなみに、2008年度は公的資金が取れなかったもので、近畿の知り合いの講演となった。)

今後もこの研究会は続けていこうと思っています。工学倫理に関心のある方は、公開講演会という形にしてありますので、お気軽にお越しください。開催情報は、斉藤あてにメールをいただければ、毎回お伝えできると思います。

saiton@ipcku.kansai-u.ac.jp

石本基金出版助成(第4回)公募について

石本基金出版助成第4回公募受付を、6月20日より開始します(締切:7月20日)。

本助成の趣旨、応募条件、提出書類等の詳細については、ホームページおよび6月発行の「石本基金ニューズレターNo.4」をご参照下さい。なお、正式な公募要項および応募書式は5月末までにホームページ上で公開します。



会務報告

(2008.4.1 ~ 2009.3.31)

日本科学哲学会第12期理事会

第8回

日時:2008年6月28日(土)13:30-14:30

議題:1. 新入会員、退会会員について

2. 大会開催時の託児所施設利用会員補助について

3. 石本基金 出版助成・若手研究助成・石本賞選考状況について
4. 石本基金 アンソロジー第2冊編集について
5. 事務局移転について

第9回

日時：2008年8月30日(土) 13:30-15:00

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
2. 2007年度会計決算について
3. 2008年度会計予算案について
4. 『科学哲学』電子アーカイブ化申請について
5. 石本基金について
6. 事務局移転について

第10回(第41回大会実行委員会合同会議)

日時：2008年10月18日(土) 12:00-13:15

- 議題：1. 新入会員・退会会員について
2. 2007年度収支決算について
3. 2008年度収支予算について
4. 来年度大会について
5. 石本基金について
6. 事務局移転について

第11回

日時：2008年12月13日(土) 14:30-15:45

- 議題：1. 新入会員について
2. 事務局理事について
3. 会員名簿に掲載する個人情報について
4. 編集委員長について
5. 石本基金について
6. 『科学哲学』電子アーカイブ化について

第12回

日時：2009年3月15日(日) 13:30-14:45

- 議題：1. 新入会会員、退会会員について
2. 役員選挙について
3. J-STAGEについて
4. 会員名簿作成について

『科学哲学』第41巻編集委員会

第2回

日時：2008年6月28日(土) 14:45-15:45

- 議題：1. 応募論文審査状況について
2. 『科学哲学』第41巻1号の準備状況について
3. 書評について

第3回

日時：2008年8月30日(土) 15:10-15:45

- 議題：1. 応募論文審査状況について
2. 『科学哲学』第41巻2号の準備状況について
3. 『科学哲学』電子アーカイブ化に関連した著作権規程の整備について

第4回(第12期理事会合同会議)

日時：2008年10月19日(日) 11:45-12:45

- 議題：1. 『科学哲学』第41巻2号の進行状況について
2. 事務局移転について
3. 石本賞選考について

第5回

日時：2008年12月13日(土) 15:50-17:00

- 議題：1. 応募論文審査状況について
2. 『科学哲学』第41巻2号の進行状況について
3. 『科学哲学』第42巻2号の特集テーマについて

第41回大会実行委員会

第2回

日時：2008年6月28日(土) 15:45-16:45

- 議題：1. 大会準備状況について
2. 大会プログラムについて
3. 託児施設利用会員補助について

第3回

日時：2008年8月30日(土) 16:00-17:00

- 議題：1. 大会準備状況について
2. 研究発表について
3. 司会者について
4. その他詳細について

『科学哲学』第42巻編集委員会

第1回

日時：2009年3月15日（日）14:55-15:55

- 議題：1. 応募論文審査状況について
2. 書評について
3. 若手研究助成報告書について
4. 提言、文献表について

第42回大会実行委員会

第1回

日時：2009年3月15日（日）16:00-17:00

- 議題：1. 会場（高千穂大学）について
2. 特別講演について
3. プログラムについて
4. 託児所について



編集委員会からのお知らせ

編集委員長 野矢茂樹

(1) 『科学哲学』第42巻2号の特集テーマについて

第42巻2号の特集テーマは「脳科学と社会」です。このテーマでの応募論文を引き続き募集しています（締め切り：7月13日）。どうぞ奮ってご応募ください。

なお、締め切りを過ぎた場合でも、自由応募論文としてこのテーマに関連する論文をご投稿いただくことは可能ですが、当該の号に掲載可能な期日内で審査を終えることができない場合がありますので、ご承知おきください。

(2) 自由応募論文について

自由応募論文は随時受け付けています。応募に際しては、『科学哲学』最新号（41-2号）巻末掲載の論文応募要領を参照の上、注意事項を守るようお願いいたします。

(3) 「提言」について

現在、ふつうの投稿論文以外に、「1. サーヴェイ論文」「2. 研究ノート」「3. 討論」という三つのカテゴリーを設け、投稿を求めています。さらに四番目のカテゴリーとして以下のものを付け加えることにしました。

4 「提言」

研究、教育、学会活動に関する意見、提案。（4,000字以内）

論文に準ずるものであり、審査も行います。有益な提言を期待しています。

(4) 文献表について

『科学哲学』は第41巻1号から、J-STAGE (<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>) で公開されることになりました。その際、J-STAGEの側から、文献情報の解析を容易にするために、文献欄を設けることが求められました。つきましては、論文や研究ノート等において他の文献に言及する場合には、論文や研究ノート等の末尾に文献一覧を設けてください。



学会・研究会予告

日本科学哲学会第 42 回大会

【期日】 2009 年 11 月 21 日 (土)・22 日 (日)

【場所】 高千穂大学

科学基礎論学会 2009 年度総会

【期日】 2009 年 6 月 13 日 (土)・14 日 (日)

【場所】 大阪市立大学



寄贈図書紹介

中央大学文学部『紀要：哲学』第 51 号 2009 年

大学教育学会『大学教育学会誌』第 30 巻 第 1 号・第 2 号 2008 年

Hirokazu Nishimura and Susumu Kuroda (eds.), *A Lost Mathematician, Takeo Nakasawa: The Forgotten Father of Matroid Theory*, Birkhauser, 2009

サンドラ・ハーディング著・森永康子訳『科学と社会的不平等：フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』北大路書房 2009 年

中才敏郎・美濃正編『知識と実在：心と世界についての分析哲学』世界思想社 2008 年

佐藤正美『データ設計の方法：数学の基礎と T 字型 ER 手法』ソフト・リサーチ・センター 2000 年

佐藤正美『データベース設計論－T 字型 ER：関係モデルとオブジェクト指向の統合をめざして』ソフト・リサーチ・センター 2005 年



事務局からのお知らせ

(1) 学会費納入について

2009 年度分の学会費をお納めくださいますようお願い申し上げます。貴台の（今年度分を含めた）学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さい。なお 0 以下の表記の方は完納となっております。

(2) 登録情報の変更について

ご登録いただいている住所、メールアドレス、所属等のご変更があった場合はお早めに事務局までお届けください。また送付先住所を所属機関へ指定されている場合は、所属機関を異動した際に送付先変更のお申し出がないと、郵送物が宛先不明で届かなくなりますのでご注意ください。



編集後記

今回のニューズレターでは、小山さんには最近活発な分析形而上学の動向について、また齊藤さんには関西工学倫理研究会についてそれぞれ寄稿をお願いし、幸い両方からご快諾いただくことができた。特に、関西工学倫理研究会は（齊藤さん自身の紹介は控えめだが）日本における技術者倫理研究の「老舗」として学際性の高い着実な活動をかさねている研究グループで、こういう場で紹介する機会を持てたのはわたしとしてもうれしい限りである。分析形而上学も技術者倫理も狭い意味での科学哲学ではないが、最近の大会ワークショップなどで取り上げられているテーマであり、現在の科学哲学会のカバーする話題の広さを示す形になっているのではないだろうか。

別の学会の話になって恐縮だが、この編集後記は、最近できた「応用哲学会」という学会の第一回大会の準備が忙しい中で書いている（といっても本当に忙しいのはODなどのスタッフのみなさんであるが）。この学会の「応用哲学」は、科学哲学や論理学も含むような非常に広い意味で考えられていて、扱うテーマにおいても会員の顔ぶれでも科学哲学会とかなり重なっている。科学哲学会の守備範囲が拡大している理由の一つは、哲学研究のありかたが多様化しているのにその成果を発表する適切な場がないという事情があるだろうが、応用哲学会の一つのねらいはそうした行き場のない研究をまとめて面倒を見るということである。両方に関わる私としては、二つの学会がそれぞれの持ち味を生かしつつ、哲学を取り巻く状況の変化に適応してともに発展していくことを切に願っている。

(伊勢田哲治)

日本科学哲学会ニューズレター No. 43 2009年5月25日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内
Fax. 03-5317-9217 [宛名「日本科学哲学会」を必ず明記して下さい]
Tel. 03-5317-9702
※学会専用電話ではありませんので、電話での連絡は緊急の場合のみにしてください。
e-mail: philsci@chs.nihon-u.ac.jp
URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pssj/>

印刷 株式会社文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1